

六月七日（火）

日本に戻れる。嬉しい。呉君一家をはじめいろいろと親身に骨を折って下さった人々に別れを告げるのは名残り惜しいが、やはり私にとって中国は外国であった。人口が多いだけに底知れぬパワーを秘めた国ではある。しかし「洗練されたエレガンス」はまだない。国そのものも、そして音楽界も、これからどのように発展していくのだろうか。環境や科学技術面においては現在の日本に比較して十年以上の遅れがあるとはいえ、常に前進してやまない国である。

日本へは午前中の便で発つ。中国入国の際に心配した税関の再チェックもほぼフリーパス、全ての心配は杞憂に終わった。終わり良ければすべて良しとも言ふ。またそのうちに中国を訪れる機会もやってくるであろうが、まずは一休み。「疲れた」というのが偽りのない感想であった。

北京でピアノを習うには

中国におけるピアノ教育現場とその実状

一九八八年六月三日、北京中央音楽学院にてピアノ専攻科の周^{ウイグレン}仁教授にうかがった話を以下にまとめてみた。周教授は現在ピアノ科教授陣の中核として精力的に後輩の指導に当たるばかりではなく、北京におけるピアノ早期教育のジャンルでもかけがえのない人物である。ハンブルク生れの周教授は、ドイツ語も英語も中国語と同じように流暢に使いこなせる国際人。実際に会って話していると「やさしいおばさん」といった感じの人物だが、その奥に秘めたバイタリティーはなかなかのものである。

中国ではクラシック音楽が非常に盛んで、コンサートなどもいつも盛況のようですね。

「このところクラシック音楽のコンサートもずいぶん催されるようになりました。日によってはいくつかなる事さえあるんですよ。北京市内にも何ヵ所か会場がありますし、その上我々の学院の中にも三つホールがあるので、運が悪いと聴衆が分散してしまって困る事さえも……」

最近では国際コンクールに入賞する若者も出てきましたが、中国の音楽教育には何か特別のカリキュラムでも準備されているのでしょうか？

「音楽専攻を希望する子供のための学校があって、ここでは小学校四年生から特別のカリキュラムを組んで勉強が始められます」

その学年までの勉強はどのように？

「最近——ここ五年程の事ですが、四〜五歳の年齢からピアノを習い始めるのが一般化してきました。まず最初はプライベートの先生について手ほどきを受けるわけです」

楽器はどうするのですか？

「買うしかありません。このところ、子供にピアノを買ってやる親がずいぶん増えました。もちろんピアノは普通の家庭にとっては非常に高価なもので、口で言うほど簡単ではありませんが……。ピアノも毎年値上が

りする一方で、それならばなるべく早く手に入れたほうが得、と思うのかも知れませんが。また、御存知とは思いますが、最近は何の方針として子供は一人、と定められたのです。ですからある程度の無理も不可能ではないし、子供に最大限のものを与えようとも思うのでしょうかね」

先生は捜しさえすれば容易に見つかるのですか？

「残念ながらノー。ですから少しでもその助けになるように、と八十三年に私が音頭をとってこの学院の先生方、学生達、それに外部からのピアニストや先生方の助けをお借りして『星海青少年鋼琴（ピアノ）学校』という、プライベートな教育組織を設立しました。今年で建校五年を経て、現在三十一人の先生が二百人ぐらいの子供を教えています」

どのようなシステムの学校なのでしょう？

「この学校は先生の余暇の時間を活用して運営されているのです。ですからレッスンには土日を最大限利用します」

どこかに校舎のようなものがあって、生徒が通って来るのですか？

「そのように利用できるような施設があれば良いのですが、まだそこまで大がかりではなく、生徒が先生の自宅に来るのが普通の形です。ここの学院内にはレッスン場があるんですよ。毎週百人以上の生徒が通ってきます。ただしこの組織で面倒を見るのは基本的には小学校三年生までの子供です。それ以降は音楽専攻の

子供のためのクラスが国のシステムとして正式にありますので」

それはどのような形で実施されているのですか？

「中国の小学校教育は六年間で、前半の三年間は全く普通の授業が行われます。だからこの時期に自発的に音楽をやりたい子供は、個人的に先生を捜さなければならぬわけですね。先程申し上げた、私が補佐しているピアノ塾に来る子供もたくさんいます。しかし普通の小学校は普段から宿題がとて多く、高学年になるとピアノの勉強を続けるのさえ難しくなってきました。そこで音楽を専攻したい小学四年生以上の子供達のために『音楽小学校』というものがこの学院の附属校として作られました」

この小学校に入学すると、音楽の勉強ばかりになってしまうのですか？

「いえいえ、一応は普通の小学校の授業も行われます。それにプラスして音楽の授業にかなりのウェイトが置かれます。土日も音楽の授業に使われます。北京に自宅がない子供のためには学院の中には寮も準備されているんですよ」

という事は、音楽の道に進みたい、という時には小学校を転校するわけですか？

「そういう事になります」

九歳の子供に、もう自分自身の針路を決定することが可能と思われませんか？

「これは子供の希望というより、親の夢と言ったほうが当たっているでしょう。それも多くの場合は音楽については素人である親の希望で、必ずしも子供の才能と一致した客観的な判断ではない事もあります」

音楽家というのは中国では優遇された職業なのですか？

「今のところは。大学まで修了すれば音楽家として働くポストもまだ充分あり、就職には困りません」

ところで、九歳で音楽の道に進んではみたのは良いが、ある時点で挫折してしまったような場合にはどうなるのですか？

「小学校で転校して音楽専攻コースに入ったとはいえ、何もこのまま自動的に大学まで進んで無理やり音楽家に「ならされる」わけではありません。音楽小学校修了後に中学（六年制）に入る際、そして大学に進む際には、誰もが例外なく入試を受けます。その時には学院の附属音楽小学校から附属音楽中学校をねらう子供達に加え、外部から受験に来る子供も多数おり、かなりの競争率となります。たとえば前回の学院附属中学校の入試では、十二の空席に対して受験生は百二十人以上だったんですよ。当然試験に受からなかった子供がいるわけですが、その場合は普通の進路に戻るだけです。大学の入試に残念ながら落ちた時には、その時点で就職の道を選ぶことも可能で、今のところは申し込めば国から何らかのポストが与えられます」

音楽中学の入試には何を演奏するのですか？

「ピアノ専攻の場合ですと、チェルニーの練習曲一曲、バッハのインベンション一曲、ソナタ形式の楽章をひとつ、それと中国人の作品を一曲、というのが課題です」

ついでにうかがいますが、大学入試の課題は？

「チェルニーかモシユコフスキー程度の練習曲を一曲、バッハ一曲、古典派のソナタの一楽章、中国の作品一曲、そして自由曲一曲です」

競争率は？

「大学のピアノ科は一学年十人の学生しか採りません。それに対して前回は三十人弱の受験生が来ました」

一学年十人の学生としますとピアノ科に限って言えば大学全部で四十人ですね。それに対して教授陣は何人ですか？

「正規の学生は確かに四十人ですが、すでに社会に出て仕事を始めている教師や伴奏ピアニストがもう少し深く勉強をしたい、というので短期間在籍するケースがありますので、実際には全部で四十五人ぐらいになるでしょうか。それに対する先生は八人。ただしそのうち二人は今外国に行っていて不在ですので、実際にピアノ科で教えているのは六人です。実技のレッスンは週二回一時間ずつ、というのが通常のペースです」

新学期は秋に始まるのですか？

「はい。九月に冬学期が始まって一月まで。そして夏学期は三月から七月までです」

在学中のカリキュラムは細かく決められているのですか？

「それほどありません。だって勉強の進度には必ず個人差が出てきますもの。最初の一年で大きな進歩を遂げる学生がいるかと思うと、馴れてきてからやっと花咲く、という学生もいます。副課の授業も卒業までに単位をとれば良い、といった程度です。ただ実技の試験は毎年行っています。そして一年生だけには実技の試験が二回あります。まず冬学期にテクニクのテストとして練習曲二曲とバッハ一曲。そして夏前にソナタ一曲と、異なったスタイルの作品を二曲演奏してもらいます。毎年の勉強ノルマとして練習曲はどれだけ、ソナタは何曲、それ以外には何を、とおおざっぱな目安がありますから、それがカリキュラムといえればカリキュラムでしょうか。三年目には四十五分のリサイタル、四年目には六十分のリサイタル、そして卒業試験となります。そうそう、あとは例年のイベントとして、中国の作曲家の作品による学院内のコンサート、もしくはコンサートを年ごとに交替で催しています。こうでもしないと皆中国人の作品は弾きたがらなくて。それ以外に、人前で演奏したい学生には毎週一回そのための機会を作っています」

学費はどのぐらいですか？

「今のところはまだ無料です。でも来年あたりからは変わるでしょう。卒業後の就職保証もなくなるらしいし……」

ということは、今までは大学を出れば必ず職があったのですか？

「そうです。この学院を卒業すると教師、あるいは伴奏者になるのが一般的なコースです。中国全土を見渡せばまだ空いているポストが多く、場所さえ選り好みしなければ必ず就職口は見つかります。以前は国の命令でどこへでも指定された場所へ赴任しなければならなかったのですが、最近の若者は知恵がつき、そうたやすく国の言いなりにはならなくなりました。音楽に固執して辺鄙な田舎に飛ばされるぐらいならば、別の職業についても北京に残った方が良く、と、いとも簡単に進路の変更をしてしまいます。その結果、地方には依然としてピアノの先生が不足している、というわけです。でもこれも数年後には変わって、そう自分分のわがままばかりは通らなくなっていくでしょう」

ところで最近の国際コンクールに中国からの参加者が増えてきました。それなりに力を入れているのですか？

「国際コンクールに出場するのは確かに最近の『はやり』になってきました。全国規模での予選を通過すると国費で派遣してもらえます。またたとえばシドニーのようにコンクール側から参加者に対して旅費が提供されるような場合、そのコンクールの主催するオーディションが中国国内でも催されるようになりました。ただ現実の問題として、こうした予選を通過して外国へ派遣される学生を持つと、先生同志、また学生同志の間での妬みや嫉みが感じられて、必ずしも良いことばかりではありません」

海外のコンクールに入賞すると、国内でその人にとって何らかのプラスの面が生じるのですか？

「とりたてては何もありませんね。強いていえば国内で何回かリサイタルができる程度でしょう。というのも中国にはフリーのピアニストという職業は存在しなくて、各人それぞれ学校なりオーケストラなりの組織に属して定収入を確保し、その上で演奏したかったら御自由にどうぞ、という形なのです。最近でこそコンサートに出演すると多少のギャラも出るようになってきましたが、以前は全く無償の奉仕活動でした」

外国に留学する事についてはどうですか？

「国費留学のチャンスは、残念ながら最近ずいぶん制限されるようになってしまいました。学校卒業後五年間働いてからでなければ、国費をもらう資格が発生しないのです。国が、十年以上も無料の教育の恩恵を受けてきたのだから、多少なりともそれを社会に還元してからでないとダメだ、と言うのです。唯一の例外は外国との文化交流の一貫として交換留学生としての資格が得られる場合でしょう。もっとも自分でスポンサーを見つけて、全てを自費でまかなえるのならば話は別です」

外国に行ったは良いがそのまま亡命してしまふ、といった危険性にはいずれかの方法で対処しているのですか？

「ある人が外国に行き、それっきり帰ってこなくなってしまうても、これは本国の人間にはもはや何ともしがたい問題です。それがたとえ国費を使つてのケースであっても、事情は変わりません。ただ、外国に残る、という事は、イコール生活が保証されることでは決してないわけでしょう。生活のためには音楽家としての道を諦めなければならぬケースだってあるだろうし。そういった道を一回は選んだ人も、いつかは祖国に帰りたいくなるかも知れません。実際にそう感じる人、きつとたくさんいると思います。だから中国をもつ

と盛り立てて、皆が帰って来たがるような国にしなくてはね」

中国の音楽大学は、よく聞く北京と上海のもの以外にもたくさんあるのですか？

「中国全土で八カ所九校あります。北京には二校あって、そのうちのひとつがこの中央音楽学院、そしてもうひとつの大学では主に中国古来の音楽芸術の会得と研究とが中心になっています」

北京と上海の学校がお互い競っている、という話を耳にしましたが実状は？

「そんなことはないですよ。大体ここで教えている先生はほとんどが上海で勉強した人達ばかりですから敵愾心など抱くはずがありません。校風としては北京の方が外国人留学生などに対しても非常に開放的であるのに対し、上海はどちらかというと閉鎖的、と言えるかも知れません。上海の学校の方がここよりずっと古い伝統があります。学校で使用している楽器については北京は大変に恵まれていて、世界でも最高級とされている楽器を多数買入れることができました」

ところで一九六六年から十年間続いた文化革命の時は大変でしたでしょう…。

「言葉ではとても言いつくせませんが、とにかく悪夢のような時期でした。それまで長い時間をかけ、心をこめて大切に育んできたものが突然全て否定され、批判され…。昨日までの教え子達が革命家となり、革命初期にはまず教師が批判の矢おもてに立たされたのです。それも優れた教師であればある程風当たりが強くなって…。たくさんの学校が閉鎖され、一般の人々の生活は全て革命のために投入されました。我々は田舎に

送られて、米を作ったり畑を耕したり、音楽から遠ざかって百姓をさせられました。北京に残った先生達も、食事にガラス片を混ぜられるような嫌がらせを受けたり拷問に会ったり。特に弾圧のひどかった上海では音楽学校の各学部長全員、十人もの先生が自殺をしたりして帰らぬ人となってしまいました。幸い北京では死者はでませんでした。一九七〇年、江青の口ききでやっと北京に戻れたのですが、学校で授業を再開しても、今までの教材は革命思想に反する、というので授業に使用できません。教材は全部自分で新しく書き下ろさなくてはならなかったのです。たとえどんな曲でも指の訓練の助けにさえなるのなら、テクニクの勉強にイデオロギーの出る幕はないはずだ、という信念をもって、たくさんの練習曲を苦勞して作曲し、学生に与えました。一九七六年、やっと世の中が正常化しましたが、本当に想像を絶するような恐ろしい時期でした」

現時点で教師が学生達に与えられる目標があるとすれば、それはどんな事でしょうか？

「我々の目標は、やはり世界に通用する第一級のクラスのピアニストを養成すること。今の若い世代のレベルは以前に比べてずいぶん良くなってきています。中国では音楽家の社会的地位や待遇も決して悪くないので、このジャンルをめざす人も今後もっと増えていく事でしょう」